

第1章 ろう者とは？

1.1 聴覚障害の区分

聴覚障害者の定義は、「聴覚に障害を持つ人のこと。程度によって、ろう、難聴に分けられ、失聴の時期によって、先天性、若年性、中途、高齢性に分けられる。」であり、身体障害者福祉法によって聴覚障害は以下のように定められている。

障害等級	聴覚障害の程度
一級	該当項目無し
二級	両耳の聴力レベルがそれぞれ 100dB 以上のもの（両耳全ろう）
三級	両耳の聴力レベルが 90dB 以上のもの （耳介に接しなければ大声語を理解し得ないもの）
四級	1. 両耳の聴力レベルが 80dB 以上のもの （耳介に接しなければ話声語を理解し得ないもの） 2. 両耳による普通話声の最良の語音明瞭度が 50 %以下のもの
五級	該当項目無し
六級	1. 両耳の聴力レベルが 70dB 以上のもの （40cm 以上の距離で発声された会話語を理解し得ないもの） 2. 一側耳の聴力レベルが 90dB 以上、他耳の聴力レベルが 50dB 以上のもの
七級以下	該当項目無し

表 1.1: 聴覚障害者手帳による等級表

この身体障害者福祉法で定められている基準は、病理学的な視点によるものであり、聴覚の有無を基準にしている。しかしながら、病理学的に同様の障害を有していたとしても、お互いに同じ障害者として認めるのは難しいというジレンマが時々見受けられる。失聴の時期によって、各々の性格を異なるものとするのはよく言われることであるが、失聴の時期に関係なく、内面的な精神形成の構築の仕方によって、聴覚の有無、失聴の時期だけでは区別できないゾーンが存在する。このゾーンについて、文化人類学的な視点で分析を試みると、新しい視点が浮かび上がってくることが分かる。

文化人類学で分析の対象となるカテゴリには、言語、習慣、慣習、伝統、宗教、モノ、規範、歴史などがあげられる。まず、聴者と聴覚障害者について、病理学的な視点から見た場合、聴覚の有無、音声言語の使用の2点が挙げられる。これを文化人類学的に再整理すると、以下のような違いがあることが分かる。

上の表から、聴者と聴覚障害者との間で病理学的な違いの他に様々な違いがあることがうかがえる（個人的な差異ではなく、生活習慣、視点で共通的な部分に差異が見受けられることを意味する）。

カテゴリ	聴者	聴覚障害者
言語	日本語（音声、書記）	日本語（書記、手指）、日本手話
習慣	（例）周囲の音に気を使う	（例）周りの視線に気を使う
	（例）音声で人を呼ぶ	（例）手を振ったり、叩いたりする
慣習・規範	（例）挨拶時に相手の目を見ない	（例）挨拶時に相手の目を見る
伝統	邦楽、西洋音楽、その他	演劇（手話）、手話詩、その他
宗教	神道、仏教、キリスト教など	神道、仏教、キリスト教など
モノ	電話、携帯電話、メール	FAX、携帯電話のメール
歴史	日本史	ろう史（主にろう教育史）

表 1.2: 文化人類学的分析による聴者と聴覚障害者との主な違い

1.2 聴覚障害者と「ろう者」

聴者と聴覚障害者の違いについて文化人類学的視点で分析を試みたが、聴覚障害者という枠の中にもいくつかのゾーンがあり、これらのゾーンに属する聴覚障害者について考察する。

病理学的な視点によるゾーンは「失聴時期」によって区分されるが、文化人類学的には、「ろう者」、「難聴者」、「中途失聴者（成人以降）」、「高齢者」ゾーンである。特に成人後失聴した聴覚障害者の場合、ろう学校の経験がない、成長期にろう者コミュニティ（ろう学校もコミュニティを形成する場の一つ）に触れていないため、ろう者コミュニティに独特に見られる文化の享受を受けていない。したがって成人前に失聴した聴覚障害者にスポットを当てて、文化的なカテゴリによる比較を試みる。

なお、ろう者コミュニティの定義は、「ろう者で形成される集団」のことであり、ろう学校、ろう者協会、趣味のグループ、宗教団体、ろう家族などが挙げられる。

カテゴリ	ろう者	難聴者
生活言語	手話	日本語・日本語対应手話
社会言語	手話・書記日本語	同上
人を呼ぶ	手を振る、叩く	声
会話	相手の目を見る	相手の目をあまり見ない
伝統	ろう者独自の伝統	日本の伝統
通信手段	Web カメラなど	書記日本語によるチャットなど
歴史	ろう者の歴史	特定したものは持たない
学校	ろう学校	インテグレーション
団体	ろう者協会、宗教団体（キリスト教など）	難聴者協会その他

表 1.3: 文化人類学的分析によるろう者と難聴者との主な違い

※ 宗教団体の場合、多くが聴者の団体の中に属しており、独立した宗教団体をもっているのはろう者コミュニティだけであり、例えば、東洋ローア・キリスト伝道教会、万国ローア・バプテスト教会、日本ローア・バプテスト・フェローシップ（キリスト教）が挙げられる。天理教、カトリックなどにもろう者コミュニティがあるが、独立していない。なお、仏教には

ろう者コミュニティはない。あるとすれば、創価学会の妙音会といわれるろう者による集団であろう。

1.3 ようこそ、ろう者の世界へ

1.3.1 「deaf」と「Deaf」ーろう者の定義

キャロル・パッデン／トム・ハンフリーズ（1988）は、『Deaf in America: voices from a culture(1988)』で以下のように、ろう者を定義している。

耳が聞こえないという聴能学的な条件について言うときには、ただのろう者（小文字で書かれた deaf）という語を使い、ひとつの言語ーアメリカ手話（ASL）ーとひとつの文化を共有しているろう者（deaf）の特定のグループについて言うときには、太文字の**ろう者**（大文字の Deaf）という語を用いることにする。（翻訳：森壮也・亜美）¹

英語圏では、「deaf」と「Deaf」をそれぞれ定義して使うことが多い。しかしながら、日本においてはこのような定義は定着していない。したがって、森壮也・亜美による翻訳にあたっては、「ろう者」、「**ろう者**（太文字）」と表現している。一般に聴覚障害者という用語は、病理学的な視点によって語られている。聴能検査によって測定される聴能レベルに応じて、軽度難聴、中度難聴、高度難聴、ろうを判定する。

本講義では、聴能レベルが高度難聴およびろうであり、かつ手話を使う人たちを「ろう者」と定義する。

「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数派である。」ーこれが私たちの「ろう者」の定義である。（木村・市田、1996）²

1.3.2 文化の定義

E.B. タイラーは人類学の父として名高く、文化を以下のように定義している。

文化もしくは文明とは、その広い民族誌的な意味においては、知識・信仰・芸術・道徳・法律・慣習その他、およそ人間が社会の成員として獲得した習性の複合的全体である。（E.B. タイラー、参照 1985）

最近の文化人類学の研究では、「人間の生活様式の全体を指しており、とてつもなく広い範囲にわたっており、人間が生まれつき遺伝的に獲得したものではなく、後天的に学習してきた集団の生活様式の複合的全体が文化人類学でいう「文化」である。」とされている。（綾部恒雄、1995）³

これらの文化の定義を「ろう者」に適用すると、次のことが言える。

日本語とは異なる言語を話し、緊密な人間関係を保って独自のコミュニティーを形成しているろう者は、聴者（耳の聞こえる人）とは異なる独自の文化をもっているといわれます。ここでいう文化とは、行動の規範、価値観や信念、歴史や伝統の意識などのことです。（木村・市田、1995）⁴

¹Carol Padden and Tom Humphries -Deaf in America: voices from a culture(1988) 『「ろう文化」案内』（森壮也・森亜美 訳、晶文社、2003、pp17-18）

²木村・市田 「ろう文化宣言」『現代思想』24 巻 5 号（青土社、1996.4） pp8-17

³綾部恒雄 「新編 人間の一生＜文化人類学の視点＞」（アカデミック出版会、1985） pp17-18

⁴木村・市田 『はじめての』手話（日本文芸社、1995） pp15

木村・市田（1995）が定義したろう者の文化を本講義では「ろう文化」と定義する。

1.3.3 ろう者コミュニティにおける文化形成

ろう者コミュニティの中で培われる聴者コミュニティ⁵とは異なる属性を有するものを「ろう文化」と定義する。『ろう文化宣言⁶』で「ろう者とは、日常生活の中で日本手話を使うマイノリティ（言語少数派）である」と定義されている。

ろう者コミュニティの中で培われている「ろう文化」の事例を以下の通りあげる。

1. 目上の人、目下の人に関係なく、肩を叩く（聴者の世界ではタブーとされる）
2. ろう者コミュニティは、ろう学校出身によって形成されることが多い
3. ろう者同士の交流の中で、出身ろう学校を確認することが多い（お互いに自己紹介するとき、出身ろう学校を聞くことが慣習となっている）
4. 食事中、箸を手を持っている時間より食卓の上においている時間のほうが長い（手話で会話を楽しむため、箸が邪魔になるらしい）
5. 夜になると、ろう者は光を求めて移動することが多い（欧米の家は、ろう者の会話スペースが台所になっている。リビングの白熱灯より台所の蛍光灯のほうが明るく視界がいいためである。）

文化は継承されるものであり、文化の継承の場としては特にろう学校、ろうの家族が挙げられる。両親がろう者で子供もろう者の場合、子供は立派な「ろう文化」の継承者であるといえる。そしてその家族の中にろう者がいる限り、「ろう文化」は継承されていく。一方、両市がろう者で子供が聴者（コーダ⁷）も「ろう文化」の継承者である。しかしながら、コーダが聴者と結婚して家庭を築くと、その「ろう文化」の継承は行われなくなる。言い換えると、コーダは二言語・二文化の環境の中で育ち、成人するとともにどれかを一つ選んでいくからに他ならない。⁸

コーダは「ろう文化」の継承者であるがために、いろいろなところで文化的摩擦を経験する。コーダについてはなにかの機会に詳細について触れたい。

1.3.4 ろう文化

木村・市田（1996）による「ろう文化宣言」の中で「ろう民族」という言葉が使われているが、ここでは、「手話を話すろう者集団」とし、その集団が持つ特定の文化について述べる。ろう文化に見る各々のカテゴリーは以下の表で表現することができる。

表の範疇に含まれるものを「ろう文化」と定義する。但し、日本文化と対比されるべきものではない。もちろん、「ろう文化」は日本におけるものと外国におけるものとは必ずしも一致しない。ろう文化と聴者文化と対比できるものとして、木村・市田（1995）は以下の例を挙げている。

⁵聴者のみの集団もしくは、聴者が圧倒的に多い集団を意味する。「ろう者」の視点から言う「聴者コミュニティ」は、一般の学校、会社、地方自治体、聴者の数が圧倒的に多い家族などを指す

⁶現代思想「ろう文化」、木村晴美・市田泰弘、青土社、1996

⁷Children of Deaf Adults の略称CODAのことである

⁸女優の斉藤由紀はコーダの子供である。彼女の祖父母がろう者であるが、彼女自身は手話を知っているものの、コーダほどではないし、「ろう文化」を享受していない。彼女のおば（田中清）はコーダであり、NHK 手話キャスターを務めている。

カテゴリー	内 容
集団生活	聾学校、寄宿舎
社会	ろう協会、宗教団体、趣味のグループ、手話サークル
言語	手話、(日本語)
規範	挨拶、礼儀、縦横関係
もの	パトライト、Fax など
習慣	(呼ぶとき) 床を叩く、テーブルを叩く、肩を叩く (家に入るとき) Fax を見る (TV を見るとき) 字幕付を楽しむ、映像をメインに楽しむ (レストラン) 食事の時間が長い (立ち話) ろう者関係の行事において、施設の玄関で立ち話が目立つ
娯楽	映画鑑賞は殆ど字幕付
歴史	日本の歴史の中にろう者特有の歴史を見出すことができる ろう教育史、ろう偉人史、ろうあ運動史
芸術	ろう者演劇・ろう者映画・手話による古典芸能・美術・デッサン・写真

表 1.4:

行動の規範を例にとると、聴者の文化では、人を指さすこと、人を呼ぶのに年上の人の肩や手近にある机を叩くこと、初対面の相手に結婚しているかどうか聞くこと、本人やその配偶者がどこの学校を卒業したか聞くなどは、多くの場合、あまり適切な行動とは言えないが、ろう文化ではどれも適切な行動になる。また、日本の聴者の間では、遠回しな表現が好まれ、結論を明確に表現しない傾向があるが、そのような言動は、ろう文化においては不適切なものと考えられている（木村・市田、1995）。

また、木村（2000）はろう者と中途失聴者・難聴者との違いについて、具体的な例を挙げている。

「確かに中途失聴者も難聴者も手で人に呼びかけることはあるかも知れませんが、ろう者とは違った使い方をしているのです。手招き一つとっても、そのタイミングとか相手の年齢、上下関係…これにあわせた細かな決まりごとがたくさん存在しており、ろう者はみなこれを共有しているのです。…ろう者の手招きは、ろう者コミュニティの中で拾得した文化そのものだと言えるでしょう。」⁹

「ろう文化」というキャッチフレーズは、欧米における「Deaf Culture」から来るものであり、木村らによって、日本におけるろう者コミュニティが自らの「ろう文化」を再認識した。これに対して疑問符を投げかける人たちもいるが、「ろう文化」の存在を認めつつ、何をもって文化とみなすかについては更なる議論が必要である。

1.4 誤解される手話

1.4.1 言語としての手話

手話は 1887 年にポーランドの眼科医である Zamenhof（ザメンホフ）によって発表された人工言語、Esperanto（エスペラント語）のような国際共通の手話であると誤解されやすい。（確かに国際

⁹木村 「ろう文化とろう者コミュニティ」『『障害学を語る』(筒井書房、2000)』 pp132

手話¹⁰と呼ばれるものは存在するが、ここでは触れない。)あるいはパントマイム的な要素をもった身体的な言語という見方を持つ人もいる。しかしながら、それはあながち正解とはいえない。言語は音声に伴うものであるという従来の言語学の考え方は過去のものとなり、手話も言語学的に分類できるものとして、一般言語学の教本に手話が追加されるようになった。¹¹ また、アメリカの著名な言語学者 N.Chomsky (1989) は、ろう者について「耳の聞こえない人が手話を使いこなしている場合には、知的に劣っていることは何もないのです。」と言語と思考との関係についてマナグア講義録の中で質問者に回答している。¹²

手話の構造について分析したのはアメリカの Willam.C.Stokoe, Jr. (ストーカー) 博士が最初であり、1960 年のことだった (C.Valli & C.Lucas, 1992)。ストーカーは 1960 年 4 月 1 日付けの歴史的な論文『手話の構造』Sign Language Structure の前書きで、

「アメリカのろう者の手話は、読み書きのような二次的なシステムと異なり、言語様の性質と機能を有しているという確たる証拠があることを、ろうであることおよびその問題に関与されている方々に提示したい。これが十全なる言語であると言語学者が判断するまでに現実には多くのろう者自身と彼らと共に働く人々にとって、手話が言語かどうかの問題はとうの昔に解決済みなのである。」¹³

と書いている。ストーカーはギャローデット大学における英語の授業で、英語に対応した手話 (Signed English) を使って聾学生とコミュニケーションしていたが、ろう学生と聴者の教官との会話で用いられる手話とろう学生同士の会話で用いられる手話が違うことに気が付き、ろう学生同士で用いられる手話を分析している。

ストーカーの研究に続いて、1970 年代にカリフォルニアのソーック研究所で手話の言語の音韻、形態、統語などそれぞれのレベルでどのような内部構造を持っているか、その点を根本から解明しようという試みが始まり、その成果は 1979 年に The Signs of Language というタイトルで刊行されている。著者である、E.Klima、U.Bellugi らは、ネイティブ・サイナーの手話の記録からはじめたが、最初に遭遇した困難は手話が分からないことではなかった。ストーカーがろう学生同士で交わされる手話に目を付けたときと同じであった。

「私たちは新米のよそ者で聴者だったが、その私たちに対してろう者が使う手話は、ろう者同士で使っている手話とはまったくちがうものだった。彼らは (外国人に対して敬意を払い) 手話のスピードを落としていねいに表現しただけでなく、手話を英語の語順になおし、英語口形をつけ、自分たち自身のことばのもっとも顕著な特長を省略して示してくれたのである。」¹⁴

¹⁰ 「国際手話」の定義は曖昧であり、日本語で言う「国際手話」は、人工的に作られた共通手話ジェスチャーノ (GESTUNO) を意味する場合と、国際的なろう社会の交流の中で、自然発生的に生まれた共通手話を意味する場合がある。前者のジェスチャーノは、世界ろう者連盟が世界共通手話として広めようと提案されたものであるが、そうした人工手話は定着することなく、アメリカのギャローデット大学 (ろう者のための唯一の総合大学) の留学生がろう者国際社会のエリートとして活躍したこともあって、アメリカ手話が実質的な世界共通語の地位にあった。最近では、ヨーロッパの台頭が著しく、現在ろう者の公的な国際交流で用いられているのは、ヨーロッパを中心に共通語として自然に形成されてきたビジン手話で、「国際手話 (IS; International Sign)」と呼ばれている。国際手話がジェスチャーノと違う点は、規範的な意味合いがなく、きわめて流動的である点で、現在国際会議などではこの国際手話が用いられているが、国際手話は基本的にヨーロッパのものであり、アジアの国々にとっては不利な状況もある。(参考: 市田 (2000) 手話文法研究室: 手話は世界共通語?)

¹¹ 『言語の科学入門』(岩波書店、1997) の「1.8 手話」pp38-41 に手話について取り上げられている。

¹² N.Chomsky Language and problems of knowledge、『言語と知識・マナグア講義録 (言語学編)』(田窪行則、郡司隆男 訳、産業図書、1989)

¹³ W.C.Stokoe Sign Language Structure, Linstok Press, 1993 Reprint (斉藤道雄訳、『もうひとつの手話』(晶文社、1999) pp148 所収)

¹⁴ E.Klima & U.Bellugi The Signs of Language (斉藤道雄訳、前掲書 pp156)

このようにろう者は聴者の前では手指英語（英語に対応した手話）を使っていたことがわかる。ろう者同士で交わされるろう者の手話について本格的に研究の対象となったのは当時としては画期的なことであった。

ろう者の手話を言語学的に分析したストーキーは二十世紀を象徴するかのようになり、2000年4月に死去している。ストーキーによる手話の言語学的分析を皮切りにソーグ研究所での成果は全世界に衝動を引き起こすには十分なものがあり、アメリカ、イギリス、北欧、ドイツなどで手話関係の研究機関が設けられ、研究が進められている。最近では、日本で全日本ろうあ連盟による日本手話研究所が設立されているが、言語学的な研究はまだまだ始まったばかりである。

1.4.2 手話のダイグロシア（手話の社会的認識）

一般に聴者が手話サークルや手話講習会等で学ぶ手話の多くは、音声日本語に手話単語を一語一語あてはめていくもので、手指日本語 (Signed Japanese) と呼ばれている。日本語の単語に手話単語を一語一語、対応させていくので、語順は日本語とほぼ同じになり、言語学の観点から見れば、手指日本語は日本語であり、手話 (Sign Language) に当てはまらない。この定義は言語学者、手話学者が行うもので、まだ一般社会には根付いていないが、多くの人は、手指日本語を「日本語対応手話」を呼び、かつ総称して「手話」と呼んでいるのが現状だ (愛知手話研究所¹⁵, 2000)。言語学的に手話 (Sign Language) と呼ばれるものはろう者集団で日常的に使っている手話のことを指し、これを「日本手話」 (Japanese Sign Language) と呼ぶ。¹⁶

戦前において、多くの聾学校では日本手話による教育が行われていたが、口話教育を導入する聾学校が増え、最終的には殆どの聾学校が口話教育を採用するに至っている。戦前の手話教育を受けた年配のろう者の大半はあまり口を動かさないことを特徴としているが、戦後の口話教育を受けた多くのろう者はその影響もあって口をよく動かす。口を動かすところを見て、日本語を話しているように見えるという人がいるが、実は日本語そのものではなく、日本語借用が口の形で表現されただけに過ぎない。また、口の動きには二通りあり、ひとつは日本語借用、もうひとつは文法標識としての役割を果たすものに分けられる (伊藤 1985¹⁷、棚田 1994¹⁸、関根 1998¹⁹)。ここで気をつけなければならないことは、日本語借用が多ければ日本語であるとは限らないということである。神田 (1984) は日本手話と日本語との間にダイグロシアがあることを指摘している。²⁰

¹⁵ 愛知手話研究所は、平成11年度・12年度文部省科学研究費補助金 基盤研究 (A) 研究課題「手話電子化辞書拡充とその実用化のための総合研究」の研究助成を受け、開設されている。

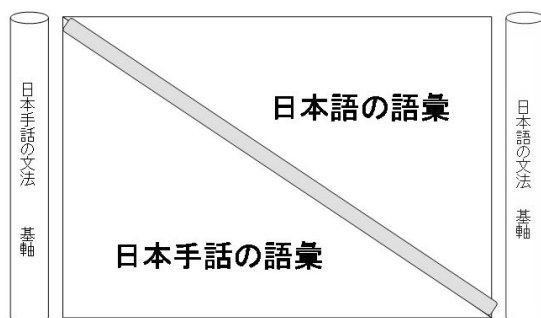
¹⁶ 愛知手話研究所 「日本語対応手話と日本手話」 <http://l.dge.toyota-ct.ac.jp/kamiya/jsl/>

¹⁷ 伊藤政雄 『手話表示に伴う非口話的口唇動作表現の言語的構造の分析』 (日本手話学会研究会モノグラフ、1985)

¹⁸ 棚田 茂 「日本手話における日本語借用と手話化現象～ムードの働き」 [『日本手話学会第20回大会予稿集』 (日本手話学会、1994)] pp83-88

¹⁹ 関根智美、他 「日本手話における口形表現の役割」 [『日本手話学会第24回大会予稿集』 (日本手話学会、1998)] pp82-85

²⁰ 神田和幸 「手話のダイグロシア」 [『日本社会福祉大学研究紀要』、No.62] pp103-119



日本手話という言語軸を基盤とした場合、日本語借用の度合いが濃くなっても日本手話であり、逆に日本語という言語軸を基盤とし、日本手話借用の度合いが濃くなっても日本語であるということが分かる。しかしながら、これは常に固定されているわけではなく、常に変動している。すなわち、二言語の混交（ピジン）、使い分け（コードスイッチング）といった社会言語学的現象を生じているのである。手話のダイグロシアはコードスイッチングによって常に変動するため、日本手話と手指日本語との境目がグレーゾーンとなっており、ろう者コミュニティに属するろう者の言語規範に委ねられることになる。